
真昼の月

桜ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真昼の月

【Nコード】

N3539I

【作者名】

桜ましる

【あらすじ】

どうして僕たちは「兄妹」として生まれたんだろう。

妹への叶わない想いに苦悩する高校生の兄、みずき瑞樹。

こんな気持ちは誰にも気付かれてはいけない。

必死に隠そうとすればするほど、それに反して大きく膨らむ想い。

そんな時、家族で訪れた旅先で……。

過去から現在。僕たちは「禁忌」を繰り返す。

プロローグ く重ねた罪く（前書き）

読者への警告

この小説には「兄妹」の禁断愛（性的な描写も）が含まれます。

プロローグ く重ねた罪く

いつも僕たちは、ふたり一緒だった。

緑の草と、花の香りに包まれる春の季節も…

頭上に昇る大きな太陽がジリジリと肌を焼く夏の日も…

銀杏並木を手を繋ぎ駆け抜けた秋の夕暮れも…

小さな雪の粒がキラキラと舞った、あの寒い夜も…

僕たちは、ずっと一緒だったんだ。

” 仲の良い兄妹”^{きょうだい} って、みんながそう言った。

学校の先生、友達、近所のおばさん達、そして両親も。

だから僕たちは嘘をついた。

最後まで誰にも明かすことはなかった。

それは僕たちの最初で最後の最大の罪。

ザザーッ…

冷たい波が押し寄せては岸壁にぶつかり、そしてまた繰り返す。

それをただただ僕は長い間眺め、ひとり岸壁の上に立ち聞いていた。
どれくらいの間、こうしていただろうか。

さっきまで暗闇だった足元が少し明るくなったのを感じ、僕は空を見上げた。

雲の間から大きな月が現われ、こちらを見つめている。

「今日は月が綺麗だな…。なあ、^{ひな}雛…」

誰に話しかけるでもなく、呟く。

その言葉の後から、後から、溢れるように君との思い出がこみ上げ、
涙となって僕の頬をつたい落ちた。

「雛っ。もう…ひとりになんてしない」

ゆっくりゆっくり…けれどしっかりとした足取りで、僕は海岸の先端へと向かう。

『お兄ちゃん知ってる？月ってね、朝も昼も実はこの空にあるんだよ』

『太陽が眩しすぎて見えただけ。でもね私、死んじゃったら…あの月になりたいなあ。』

『いいんだ、誰にも気付いて貰えなくても。』

「たった一人の大切な人が」私がそこにいるんだ”って感じてくれたら、それが一番嬉しい！」

『私、ずっと見てるからね…。だから、お兄ちゃんは…いっぱい生きてね。約束…』

君は、怒るかな…。

約束を守れなかった僕のこと。嘘つきっ！て泣きそうな顔して言うかな。

ううん、それとも…一人で寂しかったって、僕の腕で泣くのかな。

…どっちでもいいか。また君に会えるなら。

今度はもっと、ずっと近くにしよう。

二度と離れない。

その夜、僕は君のもとに飛び立った。

ゆらゆら…

水面は波で揺らされ、歪んだ月が僕をまだ見つめている。

月の灯りと、波にのまれた身体が深く沈んでいくのを感じながら…

僕はゆっくりと目を閉じた。

プロローグ ～重ねた罪～ (後書き)

はじめまして。

桜ましろですm(´`´)m

初めての投稿で、若干びびっております(小心者。笑)
禁断愛がテーマの「真昼の月」ですが、主人公の「瑞樹」は
このお話しではまだ登場していません。

え?ではこの男性は??

それは追々明かされていきます^^

今暫くお待ちください。

尚、注意書きであった「性的描写」は現段階では含まれておりません。こちらも追々になります。

焦り（前書き）

”好きになつてはいけない人” そう思えば思うほど、どんどん好きになつてしまふ。そんな経験ありませんか？ 友達や、友達の恋人。時には先生だったり、兄弟だったりもする。人の気持ちつて難しいですよ（* < > *） 抑えようとすると、全く逆の方に向いていったりして。そんな自分に自己嫌悪したり…。この「真昼の月」は殆どが主人公の瑞樹をメインにいろんな人物の視点から見た「思いや感情」を随筆していきたいと思つています。読んで頂ける皆様に、少しでも彼らと同じ気持ちを感じてもらえたら嬉しいです。

焦り

「ねえ。まだ起きてる？」

深夜。

ちょうど日付が変わる頃、その突然の声に焦る俺。

ベッドで横になって読んでた雑誌を、急いで後ろ手に枕の下へ押し込み、

声のする方へ顔を向ける。

視線の先には、開けたドアの隙間から少女がちょこんと顔だけ覗かせていた。

「ち、ちいつ！」

「いま、何か隠したでしょー？なんか慌ててたー。」

俺が慌てて隠した雑誌がどんなものなのか分かったのだろう。

彼女は悪戯っ子のようにクスクスと笑いながら部屋に入って来たかと思うと、

何のためらいもなく俺の横に腰をかけた。

「ちい〜。」

お前なあ。ノックくらいしろっていつも言ってるだろ？」

気づかれてしまった恥ずかしさと焦りを紛らわすように、わざと深いため息をついてみせる。

「だけどそんな俺に彼女はまったくお構いなしだ。」

「だってえ〜。もう勉強飽きちゃったんだもん。」

唇を尖らせ言っつ。

でも、答えになっていない。

「あのなあ……。受験生が何言ってるんだよ。」
「だってえ。」

そう言って彼女は少し不服そうな顔をした後、
ひらめいたように両手の指をポンツと顔の前で合わせる。

「でも、まあ大丈夫だよ！」

あたしがピンチの時はいつでもお兄ちゃん助けてくれたでしょ？
？」

「はあっ？」

「小学生の頃、友達にいじめられた時も、

お隣の玲れいくんくんにチビだっってからかわれた時だって。昨日も……」

「……おいおい。」

今更だけどさ、お前つて……相っ当っ、バカ。だよなあ。

勉強はお前がやらなきゃ意味ねっのっ。

そんなんじや俺と同じ高校なんか受かんねーぞ」

ツツ、と人差し指で彼女の頭を小突くと、彼女に負けなくらい
の悪戯つばい笑みを作って言った。

「じゃあ、なんだ？」

成績の悪いお前に代わつて、女装した俺が試験受けるかあ？」

わざとらしく嫌味なセリフ。

そんな言葉にも、

「そっかあ！そっだねっ！」

……でもお、お兄ちゃんでかいから、すぐばれちゃうかも……。

あっ！でもでも」

嬉しそうにいろんな案を考え出し、彼女はおしゃべりを続けるのだ。

そんな無邪気に笑う彼女に俺は……

返す言葉が……見つからない。

あんぐりと口を開けたまま、暫く彼女の馬鹿な妄想に付き合った。

「はあ。これだからお前は…」

俺の呆れたという一言に、彼女のおしゃべりは止まった。

やっぱりちよつと不服そうに、こちらを見つめている。

ふと、さっきの彼女のおしゃべりと、自分がセーラー服を着て試験を受ける姿を想像してしまった俺はぶはっ！と吹き出してしまった。

「うははははっ。ありえねえ、キ…キモッ！ふははははっ」

「ちよつとお！人の顔みて『キモッ』ってなによお。ひどいよお、お兄ちゃんっ」

相変わらず会話が噛み合わない。

彼女の頭を、俺は笑いながらポンツと撫でるように叩き

「…勉強しなさい。」

と少し真面目に言ってみた。

が、やっぱり抑えることが出来ない。

また吹き出してしまふ俺に向かって、彼女はプクッツと頬を膨らませて見せた。

「だって、数学わけ分かんないんだもんっ。

連立方程式？とか、普通に生きてくのに必要ないよ。そうだしよ〜？」

不意に同意を求められる。

むむむ。

確かに、もつともだ。

自慢じゃないが、俺は中学の時も、高校2年の今でもトップクラスを保持する成績だ。

そんな俺でも学校の勉強以外じゃそんなの使ったこともない。

せいぜいたし算・ひき算、んでもってかけ算とわり算くらいが出来ればなんとかなるもんだよね。

買い物だって、足し引きできれば大丈夫だし…

思考回路が別の方へ向いたおかげで、さっきの笑いはどこかに消えてしまった。

パタパタと床から少し浮かせた両足を交互に揺らしてみせる彼女。俺はそんな姿を横目にぼんやり眺める。

いたずらっぽい笑顔と、小さな体、ツインテールの長い髪が

15の年齢よりももっと幼く見える。

彼女は”高階千尋”たかしなちひろ

小さいからか《ちい》とか《チビ》とか呼ばれている。

二つ年下の…

俺の

妹だ。

いや…本当は、ちいを妹だなんて思ってなんて

……ないんだ。

俺はどこかおかしいのだろうか。

同じ血を分け合った実の妹にこんな感情を向けている　なんて。

みんなが知ったら…、両親が知ったら…、ちいに知られたら、どう思うだろう。

拒絶されるに違いない。

サラサラと甘い香りのする艶やかな髪

長い睫毛に、ピンク色の唇

細い手足にちいさな爪…

”少女”が抜けきらない可愛い声も、その口調も…

何を考えているんだか分からないけど、そこがまた可愛いと思ってしまっ。

確かに馬鹿だけど…。

年をかさねる毎に、どにんどん女の子になっていく身体も…。

「…ちゃん？…ねえっ、お兄ちゃん？

もお！瑞樹お兄ちゃんっ！」

「え…えっ！？」

我に返ると、上目遣いのちいが少し怒ったような表情をしている。さらに、まるで俺の体の上に乗っかるような格好で顔を覗き込んでいた。

その体制のせいで、キャミソールの胸元から素肌がのぞく。

柔らかさうだな…。

思わず手を伸ばしかけた俺ははっとした。

「うわっ！…！」

ドンッ！と、その伸ばしかけた手で、彼女の肩を押した。

「きゃっ」

後ろに倒れ込んだ彼女をそのままに、俺は左手で自分の鼻と口を覆った。

や、やばいっ。

俺は今何しようとしたんだ…！！

バカは俺じゃないかつ！

俺、絶対変な顔してた！

絶対エロい顔してたっ！

は…鼻の下伸びてたかもっ。

ドクドクと心臓が早鐘を打つ。

ズツの上…ふたりきり…。

しばらくの沈黙の中、時計の音と俺の鼓動が部屋に響いていた。

焦り（後書き）

第2話を読んで頂き、ありがとうございます。主人公《瑞樹》の登場です。さらにシリアスな話しから一変、お馬鹿キャラも登場！プロローグを読んで頂いた方はお気づきかも知れませんが、1話と2話では一人称も変わっています^^ 男性の方は話す相手によつて「僕」や「オレ」など使いわけをしたいと思います… この場合…？ その謎はまだ先のお話し^^； ところで、瑞樹の容姿や性格なのですが、私の力不足でいろんな事がまだまだ描写できていません（；・；）く、悔しいっ！簡単に言えば、「兄っこうであつて欲しい」という私の偏つた見方による「勝手な妄想」と「企み」により生まれた人物で… 実際こんな人が近くに存在すれば、間違いなくついて行ってしまうだろうな（笑）

そして私は今日も、悶々と瑞樹の妄想に夢を膨らませるのです…^
^；

思いがけない告白

ドクドク…

ドクドク…

沈黙の中、最初に口を開いたのは彼女だった。

「もお、なにい？いきなり」

彼女は俺のしようとした事に気付いてない様子で、ゆっくりと起き上がった。

そんな彼女を見て俺はほっと胸を撫でおろす。

「わ、悪い…、びつくりして。」

大丈夫か？手とかひねってないか？」

「ビツクリはあたしの方だよ。」

うん。ダイジョブダイジョブ！ほらっ」

そう言つて、手首をプラプラと振って見せる。

「そういえばお前、なんか用だったのか？

こんな時間に部屋にきて」

本音をいうと、まだ少し怖かった…。

ちいが俺の部屋に来るのは良くあるし、珍しいことではなかったけど、ちいがさっきの俺の行動に気付いていて、『何をしようとしたのか』と問われるのが怖かった。

だから一刻も早く話題を変えたいと思ったんだ。

「えっと…」

俺の質問に彼女は動きを止めたかと思うと、そのまま俯うつむく。

「ん…？ちい？」

どうしたんだ、ちいのやつ…。
彼女は俯いたまま、今度はピタリと動かなくなってしまった。

「おい？」

「なんだよ…どうした？」

「……………」

「やっぱりどつか痛いのか？」

「あつ…あの…っ」

「んん？何だ？」

俺は心配になつて、さっきまで大丈夫だと振って見せていた手首を優しく握ってみる。

なんともなさそうだ…。でも彼女の身体は微かにだけど、小刻みに震えているようだった。

「あの…」

そして、おどおどとした口調でしゃべりだしたかと思うと、今度は勢いよく顔をあげ、俺の目を見て言った。

「あのねっ！」

・
・
・

え？

続けられた彼女の言葉に俺はまた凍りつく。
ドクドクとまた心臓が大きく鼓動し、頭が真っ白になった。

「友達から頼まれたんだけど！」

れ……、玲くんって、彼女とかいるのかなっ!?…

…友達が聞いて欲しいって。

ほ、ほら！お兄ちゃん、玲くんと仲良いでしょ？」

詰まる声で顔を赤くしながら、そう言った。

ギョツ…

彼女の手首をつかんだ手に、一瞬力が入る。

今までにない表情を見ると、それは『友達の話』ではないことがすぐに想像できてしまった。

「…っ。お前、あいつの事好きなのか？」

「ふえっ！ち、違うよっ。あたしじゃなくて！友達、友達！」

彼女は声を裏返らせ、力いっぱい否定してみせるが、ますます赤く染まっていく顔を隠すようにして、また下を向いてしまうのだ。

明らかに動揺しているのが分かる。

そして、その意外な反応に俺も動揺していた。

俺ら兄妹と玲は家が隣同士で、昔からの幼馴染ってやつだ。

玲と俺は年も同じで何かと良くつるむ…だから自然とこいつとも関わる事が多く、今も家族ぐるみの付き合いが続いている。

けど玲はというと、ガキの頃からちいに対する態度は冷たいものだった。

「おめえ、うぜえよっ！」

兄貴ん周りばっかチヨロチヨロして！

チビは向こうで遊んでろよっ！」

とか言っつて、ちいのことをひどく嫌っていじめたりもしてたし、無視して相手をしてやらないこともあった。

そんなあいつを、”ちいが好きになることはない”って、俺は心のどつかで安心してたんだ…。

「…自分で聞けばいいだろ？」

「だ…、だつて！！」

玲くん、あたしのこと避けてるんだもん。

やっぱり…あたのしのこと嫌いなのかな？…彼女いるのかな？」

「…どうして知りたいの？ 友達が、か？ そんなの嘘だろ？」

「…好きなの。あたし、玲くんれいのこと、ずっと好きだったんだもんっ！

だから高校受かったら告白しようって！でも、怖いんだもんっ」

シヨックだった。

”恋”とか”愛”だとか全然興味もなさそうで、『兄ちゃん、兄ちゃん』と俺の後ばっか付いてきてたのにつ。

俺がどんな気持ちでずっとお前を見てきたかなんて、全く気付きもしないで…。

彼女の口からそんな言葉を聞くなんて…。それも、一番身近なあいつのことを…

真っ白だった俺の頭の脳は、一気に熱をもつていく。

このまま彼女の腕を引いて、むちゃくちゃにしてやりたいっ。

俺の気持ちぶちまけて、いっそなにもかもぶち壊してやりたいっ。

そんな衝動に駆られそうになるのを俺は必死に押さえこみ、掴んでいた手を解いた。

俺が強く握り締めていた彼女の腕は…少し赤くなっていた。

「あいつ、彼女いるよ…。」

それにしょっちゅう違う女連れてるし、やめとけ。お前には合わねえよ」

「そ…、そっかあ。そうだよねっ！玲れいくんカッコいいし、モテるもんね。」

あたしなんかとじゃつり合わないよねっ。えへへっ」

そう言っつて無理に笑っつてみせる彼女に、俺はまた胸が痛んだ。

ほんとは、彼女なんていない。

あいつは良くいろんな女と一緒にいるけど、今までも『面倒だ』つて特定の女と付きあおうとはしなかった。

だから、どうこうつてわけじゃないけど…。」

ちいの思いを知ったからか、あいつに近づかせたくないと思った。

本当に俺は

異常なのかもしれない。

「聞いてくれてありがとう！お兄ちゃん」

「あたしもう寝るね！おやすみなさあい」

そう言っつて、彼女は無理な笑顔を作ったまま自分の部屋に戻った。

きつと彼女は部屋で、一人で泣いているに違いない…。

目を閉じれば、彼女の泣き出しそうなあの笑顔が浮かぶ。
その晩、俺は眠ることが出来なかった。

思いがけない告白（後書き）

3話目です！

思ったより話しがなかなか進みません！

そして、上手に書けません！

いろいろとダメダメな作者であります（^^;）

いやはや、申し訳ないm（―）m

いやあ、それにしても・・・

この兄妹は感情が動きすぎですね（笑）

とはいっても、作者の私は感情の起伏というものがあまりないので、
こういう人物を書くのは難しいけど楽しいです^^

ちなみに、この時点（2〜3話）で季節は9月頃の設定なんですけど、
4話で一気にジャンプツ！！ありやりや〜っ！？（笑）

力不足全開な作品ではありますが、
きっと読んでくれている方がいる！
と信じて、がんばります^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3539i/>

真昼の月

2010年10月20日20時05分発行